

2012ITU 世界ロングディスタンストライアスロン選手権レポート ITU Long Distance Triathlon World Championships 2012 Report

開催日：2012年7月29日（日）

開催地：スペイン・ビトリア
Vitoria Gasteiz

糊澤 信 Makoto KURUMISAWA

世界選手権出場が決まってひと月余り、オフィシャルツアーやユニフォーム、バイクを運ぶ準備やらあわただしかった。世界選手権で勝負ができるとは思わないが、怪我をしちゃいけない、風邪をひいちゃいけないと、それなりのプレッシャーがあり、練習も日常もいつもより慎重になる。2週間前の皆生のダメージも感じられなかったが、寝ていてふくらはぎがつって、そのまま痛みが残ったり、寝違えたのか振り向くと肩甲骨周りが痛かったりと、気を付けていてもいろいろあったが、動きに支障が無いので気のせいだと思うようにした。海外レースも初めてなので、準備にも勝手の違いを感じた。

成田には、予定通り出発2時間前についた。送ったバイクを受け取って、チェックイン。手続きは、滞りなかったが以外に時間がかかった。エールフランスでパリまで12時間、マドリッド乗換のターミナルでチームジャパンのメンバーが集まりだす。空港からバイクは別送して、近くのホテルにチェックイン、オリンピックの開会式など見ながら寝た。翌朝も早く、列車でビトリアへ。バスでホテルに移動。金曜到着組とは時間差行動になり、あまり会わない。パスポートチェックのある受付を済ませて、トライアスリートで大混雑の Pasta レストランで昼食。バイクも無事に組み上がり、トランジションバッグの準備をして、チェックインに向かう。バスで郊外の湖のスィム会場へ。右側通行は違和感があったが、バイクで試走するととても気持ち良かった。バイクやヘルメットのチェックは普通だったが、ユニフォームチェックがある点が世界選手権らしかった。とりあえずレース参加へのステップを進み、日本代表でのレースに近づく。町に戻ると8時過ぎだった。夕食のレストランは9時からオープンが標準のようで、時間の感覚が日本とは随分と違う。カーボローディングとは関係なく、スペイン、バスク料理の夕食。時差ボケの影響もあるのか、あまり眠れないまま朝を迎える。朝食は、相部屋のKさんが持ってきてくれていたパックのごはんとコップに入った味噌汁。シャワーのお湯での調理に難があったが、味を求める場面ではない。まだ暗い6時の送迎バスでスィム会場へ。

これで、DNSの心配もなく日本代表でレースに参加できると一安心である。雨が降ったのか、大会で用意してくれたカバーは濡れていた。準備は補給食のセットだけなので、時間的には余裕で、ウロウロする。トイレ車両が面白い。ウェットを着てちょうど良いくらい、気温は低く、水温も20度ほどのこと。スィムアップは、水に入っただけという感じだったが、水の冷たさへの不安は解消された。エリートから始まる5分おきのウェー

ブスタートで、自分の組は200人程度か。早い組のスタートが始まり、緊張感も高まってくる。

スイムスタート、湖岸に沿って2, 3列に並ぶ。チームジャパンのメンバーもばらけてしまい、周りの選手はみんな大きい。バトルに巻き込まれない様にと、ほぼ左端の後列に並ぶ。遠くに小さなブイが一つ見えるだけである。落ち着いてスタート。幅いっぱいに進んでおり、集団の中心はどんどん前に離れて行ってしまい、バトルは皆無だった。右に集団を見ながら、周りの選手との位置取りと進行方向を調整しながら、無難な巡航速度への移行を目指す。少し苦しくなってきたリズムがおかしくなった5、6分の頃合い、顔を上げて周りを見渡すと、後ろにはまさかの十数人程度。態勢を立て直そうともがいているうちに、抜かれて行って後ろは数人に。せっかくの世界選手権なのに、周りのペースに圧倒されて序盤に失敗レースになりそう。何となくリズムが戻ってきたが最初のコーナーの1500mの半分にも達しないうちに、後ろのウェーブの緑のキャップの選手ばかりになる。その集団にもついていけず、また別のキャップの選手たちに追い抜かれる。コーナーを曲がった先ではうねりが大きく、しょっぱくはないが何度も水を飲む。まばらな周りの選手たちと同じ速度になるころには、キャップは色とりどりである。コースロープも中間のブイも無いので、コースは面であると感じ、はるか遠くに見える人も同じゴールを目指しているはずだ。左端を泳いで、左カーブはブイに沿って曲がっているが、間でどれだけ蛇行しているかわからない。遠くのゴールのゲートが見えるまではどこを泳いでいるかわからず、周りの選手と監視の船が頼りだ。不意に水草の中に突入してしまい、顔やら腕やらに絡みつく。何とか脱出したと思

いきや、右の耳のあたりに絡みつくものが離れない。確認すると、ウェットスーツのひもで、我慢しきれない。あと500mくらいか、ゴールが遠くに見える。不安のあったふからはぎがつりだす。泳ぎながら直すしかなく、足首を曲げてごまかしながら我慢する。危機は去るが、一触即発で恐る恐る泳ぎ続け、なんとかスイムゴールへ。出来は良くなかったが、失敗というほどでもないのにこの状況、やはり世界選手権のレベルは高い。



周りのバイクもほとんど残っていない状態で、トランジションで周りを気にする必要も無い。芝生の地べたに座り込んでウェットを脱ごうとするが、足首が抜けずに足がつりそうになる。後から上がってきた、Aさんが一言、「もう、こうなったら楽しみましょう」。なんとかウェットを脱いでバイクスタート。これだけ遅れているので、バイクで取り返そ

うと意気込んだ。35km/hペースで押そうと思うが、スタートダッシュで腿に乳酸が溜まっているのか脚が重く、寒ささえ感じる。周囲の女子や年配の選手と互角に抜いたり抜かれたり、後ろからオープン参加の強力に速い選手が抜いて行く。逆風やゆるやかな上りのせいか、ペースが上がらない。120kmの走り方が分からず、少なめだった手持ちの補給食は前半に食べつくしてしまった。



次第に雲はなくなり、時々現れる地面の凸凹群や、石畳に注意しつつ走る。前後に選手が見えない独走の期間が多く気合も入らないが、抜いて行く選手は速すぎて追えない。バイクも全く通じないと感じた。戦闘意欲はほとんど無くなり、交差点のロータリーや、ひまわり畑、メガソーラー施設、ヨーロッパの道を楽しむ。ペースも30km/h程度に落ちたが、バイクでトップの選手に追いつかれる悪夢はなんとか回避した。エイドのアクエリアスは日本とは味が違い、固形物の中身はグミのような食感、ジェルは甘すぎず食べられた。逆風で緩やかなアップダウンが続くコース、DHポジションを取り続けのせいか腰も痛む。ほとんどの選手が使っているTTバイクやエアロヘルメットは威力が発揮されそうなレースだ。不意に集団に追い抜かれた。間もなく後ろからバイクが近づいてきて、マーシャルが何かを言っている。聞き返すとディスタンスとのこと。ジャスト・パストと言い返すとOKと先に行ってしまったが、脚を止めて前との距離をとる。ドラフティングの意思は全く無いのでペナルティーのルールを覚えていない。イエローカードは出されていないし、笛も吹かれていないから大丈夫だと思うが、2回目の注意でペナルティーと言っていたような気もする。今のはノーカウントなのか、これでドラフティングで注意というなら不本意だ。気持ちも弱って、抜かれると必要以上にペースダウン、たまに前の選手に追いついたりするが、一定距離でしばらくタメて、猛ダッシュで抜き、しばらくするとたるんできて追い抜き返されるという感じだった。こんなはずじゃないと2週目に気合いを入れ直そうと思ったが、あまり調子は変わらなかった。道端のあちこちに落ちているバイクボトルや、ジェルの袋が気になった。2周回目を終えて、残り10km程度。街に向かって周りに建物が目立ち、交通規制の車が並んだ間の車線のようなコース、普段走りなれたような景色になってやっと調子が出てきた。歩道からの応援の中、間もなくバイクゴールだった。自分のパフォーマンスも不満だったが、バイクも通じなかったというメンタルの影響が大きかったように思う。

トランジションはスムーズだった。余力はあったが、残るカードは国内レースでも足を引っ張るランだ。こんな感じだと、4周目はさびしいことになりそうだ。ランコースに

出るところが下りで、勢いよく飛び出して周回コースに合流する。何週目かは解らないが、走っている選手は驚くほど速くはないが、確実に抜かれて離れていく。酷暑のレースではないが、晴れて十分に暑い。抜いて行く選手がゴールに向かっていく。自分はあと4周だ。細かいコーナーが続き、ヨーロッパらしい風景の通り、沿道の地元の人々も盛り上がって、力のこもった応援をしてくれる。公園の中の対面コース、チームジャパンのメンバーとすれ違うたび、手であいさつを交わす。トイレカーで用を足すため、ユニフォームを脱ぐと、背中のジッパーを上げきれなくなる。エイドで、謎の鮮やかに青いスポーツドリンクを補給する。2周目からは勝手にわかってくるが、選手は何となく減ってくる。沿道の人



も、全身でガッツポーズを作って応援してくれる。ベンガ、ベンガ、ハポネス！、マコト、アニモ、アニモ！スペイン語的にもゼッケンに書いてあるマコトは読み易いようだが、ユニフォームにあるクルミサワは読めなさそうだ。町では東洋人自体が珍しい感じだ。気分はだんだん楽しくなってくるが、脚は重くなってきてペースは上がらない。関係ないと思って覚えていなかったが、想定タイムよりだいぶ遅く、制限時間が気になりだしてきた。完走できない訳には行かないので、確認すると余裕なことが判明、無理にペースアップする必要は無い。4周目になっても思ったよりは選手はいたが、残っている選手は辛そうな選手ばかりだ。抜いて行った選手が歩いているなんてこともしばしばだった。最終週なので、感謝の気持ちをこめて応援してくれる人に手を振ったり、ハイタッチをしたりだった。カフェに向かって手を振ると、大いに盛り上がる。ゴールまで1kmを切ると、楽しさ以外の要素は無くなった。ゴールは町の中心広場で、近づくにつれて沿道の人も増えてきて、力も湧いてきた。スタンドの前を右に入って、水色の道をスキップしたい気分でゴールした。



自分の力を出し切れたとは言えないが、そんなのは関係なく実力不足を痛感した。タイムは8時間52分8秒、順位は年代86位で最終完走者だった。パフォーマンスもレザルトも不満だが、楽しいレースで、貴重な体験ができた。ゴール後は荷物とバイ



クを引き取って、まだ走り続けているチームジャパンのメンバーの応援。

ホテルに帰って、急ぎ帰り支度。距離が多少短いせいかダメージはあまり無い。みんなで向かったクロージングパーティーは、何もオーガナイズされておらず、地元の人と混ざって勝手にビールを飲んで三々五々。昨日に続いてスペイン料理のレストランへ。日本だと深夜の時間の12時頃にホテルに戻った。

関西の人たちは3時スタートとのことだったが、自分は幸い10時スタートで、朝の散歩で多少の観光気分を味わった。バスでマドリッドへ。搭乗時は大人数のバイクチェックインに手間取って、飛行機の出発が遅れた。パリ経由で成田へ。なんとか無事にレースを終えて帰国した。